

【エッセイ】

「大東文化大学の思い出 チルー in 本土（ナイチ）」（前編）

宮城静子

（1976年外国語学部英語学科入学・1979年度卒、第28期生）

エッセイ概説：

以下、紀要編集委員の一人（谷本）として簡略ながらエッセイ概説を記したい。なお、今号では主に東松山校舎での出来事を描いた前半部分を（前編）として掲載し、板橋校舎時代を描いた後半部分は次号以降に（後編）として掲載予定である。

大東文化大学への進路選択

沖縄が本土復帰して数年後の1976（昭和51）年、宮城静子さん（大東文化大学外国語学部英語学科1979年度卒業生。旧姓は上里。原稿では、沖縄地域での童名“チルー”と称している）が、高校卒業後の本学入学に至るまでの進路選択について、故郷沖縄を遠く離れて東京へ上京することへの葛藤や期待というご自身の素直な気持ちを、興味深くここでは言及している。宮城さんは、幼い子どもの頃から教師になるのが夢であったという。その目標である教師になるために、大学進学を目指すことになるが、両親が当初望んだように沖縄県内での大学進学を志望せずに、大東文化大学への受験を選択している。宮城さんの身近には、本学出身の恩師の先生や本学に在学していた先輩らが居て、幸い本学に関する情報は耳にし得ていた。さらに宮城さんと一緒に本学に進学をした友人の存在も、かなり大きいものであろう。同年2月の受験時には、宮城さんはいまだ両親に内緒で、本学の検定料（1万円）を自身のお小遣いで賄って沖縄の会場（那覇高等学校）で受験し、その後合格通知が手元に届

いた。合格後も両親はしばらく反対したようだが、ともに協力し合える宮城さんの友人もまた大東文化大学へ進学することもあって、本土・東京への進学について“可愛い子には旅をさせろ”という思いから賛同してくれたのだという。当時、本学の入試事務室が実施した新入生アンケート（1976年度93%回答）によれば、本学の受験を新入生らが決定した時期については、来春の受験を控えた高校3年生の10～12月が20.4%でいちばん多かったことも自然な流れといえるかもしれない。さらに同アンケートでは、新入生らが本学を選んだ理由について、次のとおり示されている。自分の力に適している（男子41.1女子19.1%）、希望の学部学科がある（男子18.5女子36.9%）、海外留学制度がある（男子8.9女子25.4%）、希望する資格がとれる（男子9.0女子35.5%）、教授陣良し（男子10.3女子20.8）。宮城さんを始めとした当時の新入生女子学生にとって、大学入学以前から自身の将来をしっかりと見据え、希望する資格がとれ、海外留学制度などの教育環境や教授陣らの教育体制も充実した希望の学部学科が整備されていることが、本学入学にあたって重要であったといえるだろう。

新入生としての学寮生活（東松山）

1976年春に入学した宮城さんも、多くの地方から上京して来た新入生の1人として、通学の便を踏まえて本学の東松山キャンパス周辺に居住することになる。1976年4月の新入生は、計2774名（女子728名、沖縄出身34名）。当時の本学学生向け宿舎としては、大学寮（東松山校舎内）、郵政寮（板橋区西台町、東松山市）、各運動部の合宿所（和光市、東松山市、入間郡坂戸町、川越市、上福岡市）、民間借り上げの契約寮（入間郡鶴ヶ島町、上福岡市）の他に、多くの民間委託の指定寮（東松山市内）が存在し、地方から上京する新入生らの要望にできる限り沿うよう、本学学生課も紹介提供していたのである。本稿に挙げられてある宮城さんが新入生として過ごした、2階建ての前田女子寮（東松山市）も民間指定寮の

内の1つであり、先輩寮長1名と新入生15名でもって共同生活を愉しく営んでいったという。幼いころからずっと南国、沖縄の離島で育った宮城さんにとって、埼玉・東松山での寒さは「半端ではなかった」と証言し、在寮の友人が使用する炬燵の恩恵にあやかり、寮生らとミカンやお菓子を食べながら気さくな団らんを過ごして友情を育てていったそうである。また宮城さんら新入生は、恒例行事として4月下旬に前田寮生主催による寮祭を体験している。当時、学生自治会主催の新入生歓迎会も開催されており、学生自治会の大野斉（法律学科・大阪出身）委員長は、先輩として激励を込めて新入生らに向け、「高校時代とは違い、大学では一個の人間としての自主的な行動にまかされています。つまり画一化傾向にあった高校時代ではなく、銘々が自分自身を方向づけできる自由があるということです。もちろんこの自由には節度がなければなりません。この自由をいかに使うかはそれこそ諸君の自由です。…私達は諸君に期待しています。大学で真の自由を謳歌されんことを！」と、エールを送った。宮城さんも本学入学当初から学校教員になるという目標を抱いていたが、前田女子寮への入居した学生らの多くも、同じように教員への志望者であった。そんななかでも、美しい声で歌が上手であった小学校教員を目指しているという友人の1人は、本学教育学科の所属であったという。1972年度から設置された教育学科は、本学のなかでもとくに入学定員40名の少数規模で、初等教育界（小学校・幼稚園）における専門的教養を履修した優秀な教員を養成することを主要な方針と定めていた。同じく教員志望であった宮城さんも、歌が上手で人を幸せな気持ちにできる教育学科で学ぶ友人に対しては、羨ましく思うあまり劣等感を抱いていたほどであったと吐露している。

大学での授業風景・学校生活

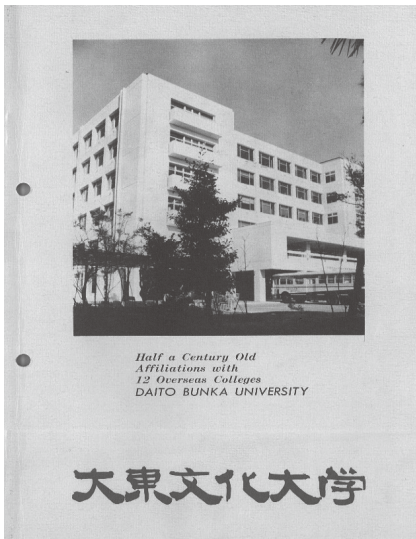
宮城さんが入学した外国語学部英語学科（初年次定員80名）では、聞き話す、読み書くといった総合的な英語学能力の習得を、中国語も兼習

しながら4年間行うものとし、卒業後の主な動向として、①中・高校英語科教師、②日本語教師、③貿易・観光・情報関係、④官公庁、等に就職するといった多彩な領域で活躍する人材養成がはかられている。最新型のヒアリングルーム・LL施設を積極的に活用するなどして、英語漬けの授業も徹底指導されている。新入生となった当初の宮城さんにとっては、外国人教師らによる英語の授業はまるで「ちんぷんかん」の印象であったというのも理解できる点であろう。関根應之教員が担当したLL教室での英語学の授業は、先生があまりに流暢な発音で印象的であったという。星野金秋教員の英文法の授業では、授業に臨むにあたり原書テキストの予習が必須であって、仲間らとともに悪戦苦闘しながら取り組んでいる。阿出川祐子教員の英会話の授業は、リスニングの強化のため繰り返し英文テープを聞き取るもので、当初は困惑した宮城さんらも継続的に受講することで英会話の実力が相応に身につき始めたことを実感している。阿出川教員の弁によれば、「相違を意識し、そういう考え方や言葉が生まれてくる文化や習慣を理解しようと努めることが大切であり、そこで初めて本当の外国語の習得が可能となる」（「外国語を学ぶということ？」1979年11月）という基本姿勢に基づいて、本学の語学指導を行っていた。後に宮城さんは、本紀要編集担当者への書簡の中で、「教職に就いた後、大東文化大学の先生方の英語教授法を沖縄の高校生を対象に行うことができました。英語音声学のパピプの発音練習は高校生には大好評でした。又進学先の生徒を対象に行ったグループに分けて翻訳させる授業は星野先生の授業が基盤になっており、沖縄でも10年程前から流行りだしたアクティブ・ラーニングの先駆でもあります。私が属する外国語学部は教育学科と異なり授業方法を事細やかに教わる機会はありませんでしたが、日頃の先生方の授業が大いに私の英語教師の活動に影響を与えて下さったことは確かです」と述べている。

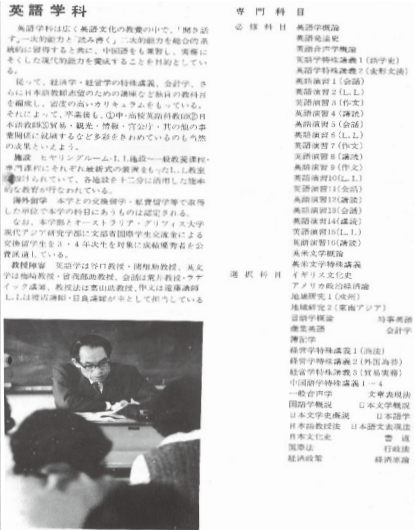
一般教養課程の体育実技は、宮城さんら新入生の希望選択による先着順のため、バスケットやバレーボールといった華やかな球技活動に人気

があったというが、宮城さんは親しい友人とともに剣道を受講登録している。大東剣道は、旧制専門学校であった大東文化学院の校友会創設時から存続する歴史ある部活動の1つであり、宮城さんが入学した1976年6月の全日本学生剣道選手権大会でも平井節朗さん（教育学科・長崎出身）が優勝して、学生剣士日本一となっている。宮城さんにとって、在学中に剣道を体育実技で受講したことが縁となって、友人とともにカナダのバンクーバーへ短期滞在することになり、当初はただ漠然としていた自身の卒業後についても、私立高校の英語教員となろうとする具体的な進路が開かれたのだという。また一般教養課程の生物学の授業などでは、東松山キャンパスの屋外に出ることも多く、自然環境に対し受講生らが直接触れて学ぶという貴重な機会にも恵まれ、沖縄から上京して来た宮城さんにとってみれば、時間を忘れるくらいのもろで道草や遠足気分にも浸るような、とても印象深くて大学を卒業してからも忘れがたいものであったと語っている。

(紀要編集委員会副委員長 谷本宗生)



1976年大東文化大学の大学案内(旧入試広報課蔵)



「大東文化大学の思い出 チルー in 本土（ナイチ）」（前編）

宮城静子

1. 大東文化大学への進路選択

1972（昭和47）年に沖縄は祖国復帰した。チルーが高1の時に、5セントの菓子パンが25円になり驚いた。2年後にチルーは進路選択の岐路に立たされたが進学することに何の迷いもなかった。教師になるのが小さい頃からの夢だったからだ。しかしチルーは沖縄の国立大学に合格できず、両親を失望させた。チルー自身もがっかりしたが、秘かに受験した大東文化大学に合格した事がチルーの人生に大きな転機をもたらすことになる。当時、大東文化大学は沖縄県で現地試験を実施していた。受験料はチルーの貯金で賄える額だった。その上チルーが慕っている先輩が1年前にすでに入学しており彼女からの情報はかなり貴重だった。英語部活動や授業の様子、下宿生活等、彼女の口を通して出てくる話にチルーは知らず知らずひきこまれていくのを感じた。又、チルーは今まで気にもしてなかった恩師の出身大学にも目をむけるようになり、尊敬している恩師が大東文化大学卒業と聞くと何やら胸がときめいた。未だ踏み込んだことのない世界へのあこがれにも似た「怖いもの見たさ」の感情がチルーの中に漠然と生じそれがいつの間にか「合格したい。入学したい。」の気持ちにふくれていった。

しかしチルーはその気持ちを内に秘め受験しなければならなかった。娘の県内進学を信じて疑わない両親への背信行為だったからだ。両親は大東文化の合格通知を見せられても本土への進学に猛反対した。2人は「ナイチに行ったら二度と帰ってこれない。」とか「ナイチは犯罪が多い。」と偏見を振りかざした。でもそれよりも国立大学に合格できる学力を備えていなかった娘を情けなく思った。父親の不満は長く続いたが、母親

は気持ちを切り替えるのが早く、父親を説得してくれた。「かわいい子には旅をさせろ。」を切り札にしてくれたのである。一転してチルー家は「チルーの本土進学」モードに入った。父親は条件を1つ出した。「日本人とは結婚するな。」と。チルーは「我々も日本人だが…。」と思いつつも元気よく「はい。」と約束した。チルーにとって本土は未知の世界だった。親が言うように怖い人や意地悪な人が大勢いるだろうと思った。本土にいる自分を想像する時、自分の姿はなぜかシンデレラ姫だった。ボロの服を着てほうきを持たされ掃除させられているのだ。それでもチルーは「がんばるぞ。」と心を強くもった。

幸いチルーには共に大東文化大学に進学する友人がいた。ちゅらは高校時代、常に席次が上位にあり、尊敬に値する友だった。このちゅらの存在もチルーの両親が本土進学を許してくれた大きな理由である。チルーはちゅらと一緒に困難を耐え忍ぶ覚悟はできていた。ちゅらも寮への申し込みをしていたが割り当てられた所はチルーと同じではなかった。2人はお互いの寮を往き来し新生活の準備をしたり、本土と沖縄のちがいを発見したりして楽しんだ。そんな中、ちゅらが「顔にブツブツが出来た。」と不安げに訴えてきた。チルーは確かにちゅらの顔に斑点を認めたが、「大丈夫よ。ジーマーミー食べ過ぎたんじゃないか。」と軽く流した。ピーナッツはちゅらの大好物なのだ。「そうだね。」とちゅらも気をとりなおした。ところが10分位過ぎてデパートのトイレから顔面蒼白になってちゅらが出てきた。「何ね。」と聞くと「お腹にまでブツブツができています。」と言う。「まさか。」と見せてもらったら見たことのないブツブツが体中にできていた。チルーに「異郷の地で変なものを食べたのかなー。」という考えが浮かんだ。「すぐに病院に行こう。」と泣きべそをかいているちゅらを促してデパートを出た。デパートを出たものの病院の場所を誰かに問うという考えは2人にはなかった。病院の看板を闇雲に探していると、目の前の電信柱に矢印と共に〇〇医院の広告があった。矢印に沿っていくと確かに医院に辿り着くことができた。診療室にはチルーも入って行っ

た。医者ちゅらのブツブツの出来具合を診て「みずぼうそうですね。」と診断をくださった。チルーは「みずぼうそう」なんて耳にしたことがない。大きな不安に襲われ、不覚にもちゅらの前で涙を流してしまった。ちゅらも涙目で「そんなに恐い病気なのか。」と弱々しく聞いてきた。「わからないが、暴走族というのがある位だから…。」と曖昧な返答しかできなかった。2人は医者に具体的な説明を求めることはしなかった。お互いもっている少ない知識の範囲内でしか理解することができなかった。医者は入院をすすめる訳でもなく、平静でいるのできっと死に直結するものではないだろうということは2人共感じた。その夜、ちゅらからチルーに電話がきた。「チルー。ミジガサーのことだった。家に電話したら甥っ子もかかっていて私は感染されたみたい。」「ナーンダ。ミジガサーか。それならそうとあの医者は教えてくれればいいのに。」とチルーは思ったが、本土の医者が一地方で俗に使われている病名を知っているはずがない。

2. 新入生としての学寮生活（東松山）

チルーは次々に前田女子寮に入寮して来る寮生達に胸をときめかした。女子は寮長を除いて15名全員が新入生である。北は秋田、南は奄美大島、沖縄から各地方の文化を携えてやってきた。持ってきた荷物も千差万別だった。蒲団に炬燵、本棚等どれもチルーには無いものだった。又、1人1人個性があった。島根弁丸出しの人、20才にもならないのに化粧しハイヒールを履いている人、笑顔がとってもかわいい人、竹を割ったような性格の人、みんな魅力的でチルーの頭からシンデレラ物語が消えてなくなった。人はどういう過程を経て友情をつかむのだろう。先ず基礎になるのは環境だ。チルーは前田女子寮に配置され15名の寮生と知り合えた。又、女子寮は2階建てで2階に部屋を割り当てられたため2階の住人同士で行き来するようになった。その次に自分と境遇が似ているものや自分にないものを相手に無意識に求める。チルーにとって秋田出身

のアコがそうだった。質素生活に慣れていることが共通点で、北国育ち南国育ちということがお互いの好奇心をくすぐった。沖縄の4月は太陽がサンサンとして、とても暖かい。チルーはそんな4月に蒲団を準備することなど全く頭になかった。ましてや炬燵などは頭の片隅にもなかった。しかし埼玉の寒さは半端ではなかった。ヒーター設備のない冷たい空間にさらされているチルーに手を差しのべたのがアコだった。自分の蒲団や炬燵を使っていいと言うのだ。夜になると女子寮の2階の住人達は誰かの部屋に集まり炬燵に入ってみかんやお菓子を食べながらきさくに情報交換を楽しんだ。炬燵の中には沢山の足が入り交り時々触れ合っては「ごめん。」と声をかけ合った。大体の人がねんねんこを着ていた。9時になると各々自室に戻ったが、チルーだけは、アコの部屋について行き、ぬくぬくと炬燵蒲団の中で熟睡し翌朝、自室へ戻っていくのが常だった。チルーは知り合っただけでまだ日が浅いアコに対して本能的に全く警戒心や遠慮心を抱くことはなかった。アコは色白で童顔。目はとてつもなく小さくてつぶるとひとしおかわいくなる。チルーは彼女の顔の表情や仕種を見るだけでも退屈しなかった。又、アコはかわいいだけでなく、時折チルーに発する辛辣なアドバイスも的を射ていた。アコは自分に寄ってくる者を受け入れるべきか否かは本能的に判断できた。この2人の間にアッという間に友情が芽生えていった。

女子寮に入寮生がそろった頃から話題は対面式や寮祭に移っていった。前田寮の対面式は正座方式で行われる。他が自己紹介をしている間はずっと姿勢を崩さない。自分のことを述べるだけでも難しいのに正座した状態からスクッと立ち上がるのは容易なことではなかった。しかし毅然とした態度で立ち上がり自分のことを述べる寮生もおりチルーは自分もあなりたいと時間をみつけては正座の練習をしたものだ。前田寮は男子寮と女子寮の経営者が同一で建物も隣同士である。行事等は共同で行われる。食堂も共同で、毎朝夕男子寮生と顔を合わせることができる。定められた時間内で食事以外の期待感をもつことができるのは、前田寮な

らではのことだった。ある夕食のことである。その日は、休み前日で食堂に来る寮生は極端に少なかった。帰省したり友人のアパートに泊まったりと外泊許可証が数多く発行されていた。1人ががっちりした男子寮生が数人の友人に囲まれて食事している様子が女子側の席からも見てとられその話の内容も聞きとれた。その学生は「最近は蛋白質摂取がうまくできてないので肉屋でミンチかつを買って食べたなら元気が出た。」と言っていた。チルーは「本土の人は食べ物の栄養素も考えながら食べているんだ。若いのにすごい。さすが本土の人は洗練されている。」と思ったものだ。チルーは食堂に来る男子学生と言葉を交すことは出来なかったが、彼らの振舞や会話を観察して新鮮な情報を得るのが好きだった。寮には47都道府県から寮生が集まってきているのに、チルーにとって沖縄以外の46都道府県出身者は「本土の人」として一括りにし、沖縄対本土を一对一で捉えていた。

さて、各人の寮生活が順調に動き出した頃、前田寮は恒例の寮祭の準備で賑やかになった。

屋台を出したり、舞台芝居の練習もある。その芝居にはその年の女子寮生から選ばれたマドンナを出演させるのが習わしである。チルー達の年にはチルーに白羽の矢が立った。事実はそのマドンナの役名が恥ずかしいものだったために2、3人は事前に断ったのだった。でもチルーにはとてもかわいい響きに聞こえた。チルーが喜んでその役を引き受けた時、男子寮生がなぜ喜びながらも驚いた顔をしたのかわからなかった。彼らはチルーを無知なのか、それとも目立ちたがりなのか、はたまた決まりかねている役柄を引き受けてくれた救世主なのか測りかねた。もちろんチルーもその役名が沖縄の言葉で表現されていたら真先に断っていた。あとになってチルーは言葉を知らない故の恥ずかしい出来事が「知らぬが仏」のまま終って良かったと思った。マドンナに選ばれたという一瞬の名誉を青春から切り取りたいとも思った。夕方からダンスが始まった。チルーは高校の時に体育祭で踊った「青い山脈」や「オクラハマミキサー」

以外のダンスは全くわからなかった。しかもパートナーが次々かわるはずなのにここでは固定化した異性と手をとって音楽に合わせてながら足を動かさなければならない。しかも異性のもう1つの手は女性の腰におかれる。音痴でリズム感ゼロのチルーは相手の足を踏んだりした。どうしてこんなに楽しくないことをやらねばならないのかという苦痛が生じた。しかし周囲は楽しそうに踊っている。つまらなそうな顔をして場の雰囲気壊すのは苦痛以上のことである。チルーは失敗しても「アハハハ。」とその場を凌ぐ習性が生じ始めた。チルーの相手をした1人は3年生だった。総寮長で滅多にお目にかかれない人物である。この方が語った言葉はチルーにとって摩訶不思議だった。「チルーさん。君は沖縄出身だね。君達ばかりに負担をおしつけて僕達は心苦しく思うよ。」と言ったのだ。チルーは沖縄の離島で無邪気に育ち、本もあまり読まず政治的なことは学校で習うことですら追いついていなかった。そんなチルーは、「沖縄の負担って何だろう。」と思ったが自分にとって曖昧なことは聞き返すことをせず聞き流した。

前田寮から大東文化大学東松山キャンパスに行くには先ず寮のマイクロバスで東松山駅まで行く。駅から池袋向けの東武東上線に乗り高坂駅で降りる。1駅乗るだけである。高坂駅から学校までスクールバスがいくつも運行している。この通学距離の長さ手段の多さもチルーにとって思いがけないものだった。マイクロバスも列車もスクールバスも時刻表通り動いていてその時刻を把握しそれに間に合わせることはチルーの19年間の生活様式にないものだった。のんびり感がライフスタイルとなっていたチルーにとって複数の目標時間に合わせて時間を過ごすことは至難の業だった。そこで工夫したことは1つ前の時間に間に合わせることだった。そうすることによって「遅刻する。」というストレスを取り除き、ゆったりと行動することができた。大学からの帰りは寮のマイクロバスは稼働してなかった。寮生の帰りがマチマチだったからだ。駅から寮まで約1kmあった。チルーはこの1kmの道をあれこれ想像を

巡らせながら、時には道ゆく人々を観察しながら歩くのが好きだった。駅周辺はデパートや商店街があり活気づいていた。4月頃、自転車に乗った街の人々のハンドルを握っている手には手袋がはめられていた。頭には毛糸の帽子をかぶりその帽子には耳あてがついていた。そしてほとんどの人が赤い頬っぺをしていた。チルーはその赤い頬っぺに「本土の人」を感じた。街並が過ぎると道路の脇には黄緑の木々や草花が多く見られた。砂埃等を被ってないので色の美しさは直接目に入った。沖縄の草木は太陽の光を受け緑が深い。花も原色で目にパッと映え、力強い。こちらの草木は色が淡くやさしさを感ずる。花びらは柔らかくて小さいが凛としている。チルーはそのような自然界で命を繋いでいる生物達に会うのも楽しみだった。彼らは質問などしない。自分がかもしだすやさしさで出会う人に癒しを与えてくれるのだ。チルーは1人で歩いている時は自分の世界をつくりあげた。自分を赤毛のアンに準えることで、退屈な時間をなくし常に小さな新鮮さを求めた。道程の木々や花々はチルーの友達だった。花々や木々を相手に時には鼻歌をひとりでに口ずさんでいた。

チルーは沖縄ではそういう自分に気付かなかった。きっと環境によって自分の奥深い所に沈んでいた赤毛のアンに似た性格が刺激を受け開花したのだ。しかしチルーは1人で学校や寮以外で過ごす機会はそんなになかった。方向音痴ですぐ迷子になったからだ。それにアコや宮崎出身のなすびさんが極力チルーを1人にしないよう影ながら配慮してくれていた。チルーは空想に浸ると無防備になった。だから1人で歩いている時、ちかんにさわられることもあった。電車で釣草につかまっていたら目の前に座っている人に片方の3つ編みにしたおさげを掴まれたこともある。その人の目は人懐こかったのでチルーは声をたてることをせず、その場から離れた。そのようなハプニングに遭うのを「自分に魅力があるからかも。」と勘違いしたチルーになすびさんとアコから喝が飛んだ。「あんたはすきが多すぎる。」と。秋になるとチルーは1kmの道程の役場の辺

りを歩くのがとても好きだった。匂いにひかれたのだ。この匂いは人がつくることはできない。金木犀が自分の存在を虫達に知らせるために匂いを発散している。チルーは人間なのにその匂いの虜になった。この匂いがする所だったら生涯住めると思った。又、チルーはなすびさんやアコの後を追って近くの寺社に行くのも好きだった。そこは別世界だった。黒い柱を中心にした建物のまわりには楓や銀杏の木が生えており黄色や橙色の葉っぱをつけていた。小学校の頃見た図工の教科書に載っている景色と同じものが目の前に広がっていた。そこで落葉を手の平に乗せそれを風にヒラヒラさせ地面におとしていくことは新しい遊びだった。さすがに20才前の遊びにしては幼なすぎることをチルーは自覚していた。チルーは何時間でも落葉をヒラヒラさせ続けることができた。しかしなすびさんとアコの「帰るよ。」の一言を聞くとやめた。

前田女子寮に運命の糸によって集められた16名は個性派ぞろいだった。島根、広島、秋田、新潟、鹿児島、熊本、香川、宮崎、沖縄と出身地も異なり地方の文化交流ができた。将来は教員を目指している人が多かった。チルーも教員を目指している所以他们に一目置いた。特に教育学科のひまこちゃんはチルーの目をひいた。ひまこちゃんは小学校の先生を目指し歌がとても上手だった。話をする時と歌う時の声は全くちがった。表情も別人になった。チルーは人をうらやましく思うあまり自分に劣等感をもったことがなかったが、ひまこちゃんに対しては別だった。楽しそうに美しい声で歌を歌い人を幸せにすることが出来る人なんてそうざらにいるものではない。チルーは自分が美しく歌を音程通りに歌うことができたなら今の百倍も幸せになれるとか、もしも神様が1つだけ願いをかなえて下さるとおっしゃるのなら歌を歌える能力を要求しようとか本気で考えていた。時間をみつけてはひまこちゃんに歌を歌ってくれるようせがんで彼女を困らせたものだ。ある日、なすびさんがひまこちゃんのことを「いるかに似ているね。」と言った。チルーは「確かにひまこちゃんのかわいらしい目はいるかに似ているかも知れないけど、水中動

物と人間を一緒にしたら失礼よね。」とたしなめたら、「あんたの方がよっぽど失礼だわ。」と言り返された。なすびさんは流行歌手の「いるか」のことを言っていたのだ。音楽のことを全く知らないチルーは歌手「いるか」のことは知る由もなかった。そのひまちゃんと2人で外出してレストランで食事をとった時のことである。チルーがカレーライスを注文したところ、ステキなプレートにらっきょうと福神漬けその他おいしそうな漬ものが盛りつけられてでてきた。カレーライスを食べ終わってから食べようと楽しみにしていたら、ウェイトレスがやってきてプレートを下げようとした。不意を突かれたチルーはあわてて素手でらっきょうを掴まんでしまった。この行動はウェイトレスを大変驚かせたようだった。チルーの顔を見ながら後退りした。しかし最もびっくりしたのはひまちゃんだった。チルーがらっきょうを掴まんだ後は一言も言葉を発することはなく、二度とチルーと外食することもなかった。

3. 大学での授業風景・学校生活

学校生活もチルーにとって新鮮だった。はるばる沖縄から両親を説き伏せてまで入学した本土の大学である。チルーは高校では席次リストに載ったことがなかった。しかしこれからはスタートラインに1年生全員が並んで同じ速度でゴールにいきつくのだ。絶対に落ち零れないぞと決意を新たに希望で胸がふくらんだ。勉学に対する意欲も充分にもちあわせていた。しかし、外国語学部英語学科Aクラスの授業が始まるとチルーの希望の輝やきが少しずつ弱くなっていった。クラスには60名の学生がいて大学の先生の授業にしっかりついていっている。「英語」の授業はほとんど英語ですすめられているにもかかわらず、質問されても即答できる。チルーは中学から高校まで英語の授業でネイティブスピーカーの生の発音を聞いた覚えがなく、先生がテープレコーダのボタンを押して聞かせてくれる英語しかわからなかった。スタートラインからして本土の学生達とチルーには英語力の大きな開きがあった。チルーには英語ず

くめの授業がちんぷんかんぷんだった。他県から来た学生達はなぜかチルーは英語をしゃべると勘違いしていたが、それは無意識にチルーの口から飛び出す「ダー」「ヌーヘー」「マーヨー」といったウチナーグチ^{どれ！ 何だって？ どこ？ 方言}だったのだ。「さあ、大変なところに来てしまったぞ。」と途方に暮れたが、ここでもチルーには救世主がいた。前田寮の奄美大島から来た律子は何と同じクラスだった。律子が先生の言葉をチルーにわかるように解釈してくれたのである。又、自称江戸っ子のヤマちゃんも親身になってチルーに必要なアドバイスをくれた。ヤマちゃんも学校の先生を目指していた。東京出身なのに思いやりがあるんだとチルーは勝手に感動した。沖縄にいた頃の本土の人に対するチルーの偏見はくずすことのできない大きな塊だったが、日がたつにつれてその頑固な塊は打ち砕かれていき跡形もなくなった。クラス 60 名を席次順に並べるときとチルーは 60 番目だ。しかも 59 番との差は大きい。このような学業面における現実をつきつけられてもチルーはドン底まで落ちなかった。人の 10 倍努力しないと 59 番の人に追い付けない状況を悲惨ととらえず「ナンクルナイサ」と前に進むしかなかった。この気持ちに至ったのはチルーの周囲の人々の見返りを求めない支援と癒しを与えてくれる自然があったからだ。60 名のクラスメートの中にはチルーが「雲の上の人」と思う人がいた。先生にどんな質問をされても英語でペラペラと回答できるのだ。発音も流暢で聞き応えがあった。ある日、彼の回答が誤りであると先生から指摘を受けた。すると彼は「僕はまちがえません。先生のおもいちがいはありませんか。」少しムッとした先生は「辞書をひいてみて下さい。」と指示した。それに対して彼は「僕の頭が辞書です。」と言いきった。その後、なんともいえない暗い雰囲気^{どれ！ 何だって？ どこ？ 方言}が漂った。チルーは自分と同じ年月を生きてきた人がどのような時間の使い方をすれば自分の頭を辞書にすることができるのだろうと思った。彼は宇宙人かもしれないと思ったが彼のようにならなくてもいいとも思った。英語の授業には緊張感を要するもの、予習が必須条件なもの、笑いが絶えないもの等があった。

関根先生はL・L教室で授業を行った。日本人の顔から流暢な英語を発するアンバランスがとても印象的だった。しかも先生の声はとても鮮明でチルーはどこで聞いても聞き分けることができた。L・L教室では学生1人1人にブースが与えられリスニングに集中できた。集中疲れを癒す為チルーは時々歌を歌ったがそれがヘッドフォンを通して全員に聞こえていたことは後で知らされた。これも青春のページから消したい場面である。

英文法はベレー帽子がよく似合う星野先生だった。学生の中には裏で彼のことを「鬼の星野」と呼ぶ人がいた。彼の授業は予習が大前提となっていたからである。予習しようにもテキストが原書とあって解読するのに大変骨が折れた。日本語で説明されている英文法ですら難解なのに英語による英文法を理解するのは至難の業だった。それでも学生達は自然発生的にチームを組んで「三人寄れば文殊の智慧」とばかりに「あーでもない。こーでもない。」と議論しあった。

阿出川先生は髪の毛を腰まで垂らしていた。彼女の授業で苦勞したのはテープから流れる英語を聞いてそれを繰り返す訓練だった。チルーはリスニングがとりわけ苦手だったが、テープから流れる英文が教科書（テキスト）通りだったのはチルーにとって救いだった。阿出川レッスンの前日には徹夜してテキストを丸暗記した。しかしいざテープが流れるとテキストのどの部分なのか見極めることができず何度も次の人に回答権を譲る羽目になった。その都度みじめ涙が流れ出たが、「継続は力なり」でいつの間にかテープから流れる英文がテキストのどの辺りかを把握するまでになった。チルーはこのあたりから「努力は必ず報われる」ことを実感した。

英語音声学の授業は雨靴をはいた先生がエネルギッシュに指導してくれた。先生は正しい英語発音をするためには勢いをつけることが必要だとおっしゃってよく教壇から飛び降りた。飛び降りた時の音を生徒に聞かせる為にわざわざ雨靴をはいているとのことだった。又、ピッと破裂

音を出させる為に薄いティシュペーパーを口元に近づけそれがゆれるまで、パッピップッと何度も発音練習をさせられた。授業中なのに発音練習をする時にはあちこちで笑い声が聞こえる程、賑やかだった。そのざわめきが先生が講義をする時まで続いたことがあった。一部のグループが私語を始めたのだ。さすがの先生も懲らしめる為にグループの1人を指名して「今、私が言った英語を板書せよ。」と指示した。するとその女子学生はチョークを持ってスラスラと板書し、したり顔までしたのである。授業を真面目に聞いてなくても質問に回答できる人がいる。これにもチルーは度胆を抜かれた。自分と彼女との開きは10年以上あるということにはわかった。その日は教室から出て寮につくまでずっと very の発音練習をした。Vは下口唇を噛んで、Rは舌を口の中のどこにも触れないようにする。これは実際やってみると簡単そうで難しいものである。

「体育」は学生が球技や武道の中から選択することができた。バスケットやバレーは人気があったが武道はいまいちだった。学生達は自分が得意なもの、望むものを登録したいと大わらわだった。早いもの勝ちだったからである。チルーは運動音痴でもあったのでどれでも良かった。アコは高校時代剣道部に所属しており2段をもっていた。授業でも剣道を登録するという。だからチルーも剣道を登録した。剣道の先生は九州男児だった。授業中男子学生が多い中で、数名の女子学生は何かにつけ目立ち、よく先生から声をかけてもらった。チルーは無器用で防具の着用ですら時間がかかった。メンの下に日本てぬぐいを頭に巻く順序を覚えるのにも時間がかかった。毎回授業でドジを踏んでいるチルーに先生がおっしゃった。「チルー、君はミス沖縄だ。」と。チルーがそれを聞いて目の前に星達がピカピカ輝くうれしさを感じるやいなや、先生は「チルーの場合はドジばかり踏むミステーカーのミスだ。」と続けた。チルーは「やっぱり。」とがっかりしたが納得もした。1年間剣道を学んでチルーが取得したのは防具のつけ方と蹲踞だけだった。しかし2年に進級してもアコと共に剣道を継続登録した。他を選びそれに慣れる煩わしさを避

けるためだったが、先生は甚くお喜びになり、ますますチルーとアコに目をかけてくださるようになった。先生は授業以外でも校庭でチルーとアコを見つけると声をかけて下さった。「オーイ、ミス沖縄元気か。」その都度チルーは「はい。とても元気です。」と元気よく返事した。長く先生の姿が見えないときはチルーは先生に手紙を書いた。「お元気ですか。私達2人ともとても元気ですよ。」で書きはじめて。先生と懇意な間柄になったおかげでチルーとアコ2人に奇跡に近いことが起こった。先生が2人に「君達の夢は何だ。」と聞いたのがきっかけとなった。アコは「カナダで会計学を学びたい。」と答え、チルーは「学校の先生になることです。」と答えた。先生は2人の為にすぐ行動を起こして下さった。カナダの剣道関係者と交流のある福島県の名士にチルーとアコを紹介した。名士の七郎先生は剣道を広めるという名目でチルーとアコがカナダに2カ月滞在できる手配をとって下さった。チルーはアコの助手という設定で行くことになったが、今まで以上に剣道の修業を行うことを求められた。福島県では七郎先生もその知人の金田さんも私設剣道場を所有しておられた。冬休み中にチルーとアコは両方の道場で剣道の練習にあけくれた。チルーとアコは大東文化大学の剣道の先生が約束通りマジックスティックを振ってくれたお陰で2カ月間のカナダ短期滞在が実現できた。この2カ月間の経験は2人の人生に大きな影響を与えた。

周囲16km、人口1万人の小さな島で生まれ育ったチルーは人口百万の本島にでて、そこから大東文化大学受験を機に本土に渡りその上広大な国カナダにまでその視野を広げることができた。チルーにとっては本土に行くだけでも夢物語だった。それ以上の展開は想像だにしていなかった。大学の体育の授業で剣道を選択したことで指導者を介して福島県の名士、七郎先生とつながり、カナダで多くの人々から愛情を受けることになる。これは創作物語でなく現実である。しかも積極的努力もしていないのに夢の方が2人に近づいてきたのだ。「運がいい。」と片づけていいのだろうか。チルーとアコには自分達が気づいていない「人を寄せつけ

る力」すなわち「運命をひきよせる力」が自分達に備っているのかという永遠のテーマになりそうなむつかしい考えは浮かばなかった。ただ降って湧いてくる幸運に感謝し精一杯その時間をすごした。

バンクーバーと帰国途中寄ったアメリカでのチルーとアコの生活は各々の日記に克明に綴られた。同じ所で同じ活動をしたにもかかわらず2人の日記を読み比べてみると異なる見地から物事が描写されていた。バンクーバーに思いを寄せる気持ちは共通だった。卒業後、アコは再びバンクーバーを訪れ、結婚し、子供をうみ、オーガニックストアを営むことになる。チルーはバンクーバーの思い出を沖縄で周囲の人々に語りその75才なる母親に「自分の人生はこれまで満足だった。あとはバンクーバーに行くだけだ。」と言わしめる程だった。

帰国してしばらくすると剣道の先生がチルーにおっしゃった。「わしが以前勤務していた岐阜の私立高校で教員採用試験がある。受験するか。」チルーは沖縄県立の教員採用試験の難易度の高さを知らされていたので2つ返事で試験を受けることにした。チルーの両親は一度ナイチに娘を送り出しているので今回の採用試験の受験に対しても表だって反対しなかった。チルーが「万一受かっても、2、3年で帰るから。」と約束したからだ。その学校からまさかの合格通知がきた時は驚いた。剣道の先生はチルーとアコにとっては魔法使いだった。

「生物」の授業はユニークだった。教室での講義より外に出ることが多かった。東松山キャンパスの裏山には広葉樹や針葉樹が見られ先生がそれらに直接触れさせてくれた。裏山には高い木が多く、沖縄のように木々の枝や葉っぱが行き手を妨げずハブも出てこないのが安心して歩くことができた。まるで遠足のような感じだった。授業の終わりには先生は学生を1人残らず集めて、集合写真を撮った。先生がおっしゃることにはこれは出欠点呼にもなりえるとのことので代返など決してできなかった。冬になると1泊で野外実習に出かけた。大変寒い時でチルーはなすびさんにジャンパーを貸してもらった。山小屋に着いた時飲んだマリムがたっ

ぷりはいった温いコーヒーの味は格別だった。凍えるような寒さでおいしさが一段と増したにちがいない。もしも時期が茹だるような暑い夏の日だったら1口も飲む気にはならなかった。山小屋の近くの湖でチルーは生涯で初めての経験をした。湖を暫く眺めていると何かもの足りなさを感じた。湖に動きがない。さざなみのような微かな動きすらない。チルーが小さかった頃、母親がぶた肉の白身でラードをつくっていたことを思い出した。火を通している時は透明の液体で動きがあったが時間がたつと白い柔い固体状に変化し、ラードになった。丁度口の広い中華鍋に入ったラードのように湖は静まりかえていたのだ。「何ですかね。動きがないです。」と湖を指さして、近くを歩いていた学生に聞くと「ああ。気温が低いから水が凍っているのよ。」と教えられた。冷凍庫でなくて広い自然の中で氷ができるなんて。」とチルーにとっては説明できない驚きだった。小石を拾って1コ湖に投げてみた。チルーの常識ではポチャと水の音が聞こえるはずだが、ポコッという音がした。しかも沈んで見えないはずの小石がポコッと音を発した場所にチョコンという音が聞こえているんだ。」ともう1コ投げてみた。ポコッと音がしてチョコンと投げられた場所にいる。3コ目も4コ目も同じだった。その時の生物の授業は真冬の植物がテーマだったがチルーにとっては自然の中で氷ができることを知った貴重な機会だった。

「法律」の授業はテキストを読解するのに苦労した。先生の講義は何とか理解できた。しかしテキストは分厚くテスト範囲のみですら内容把握には苦労した。チルーはこれまで本といえば壺井栄全集やヘミングウェイの短編小説や伝記物語の類しか読んだことがない。説明文や論文など手にしたことがない。新聞ですら読まなかった。法律の解説文を読んで理解するのは読解力が十分に備わっていないチルーにとって不可能に近かった。でも、テスト勉強はしないといけない。大学の試験は問題数が「～について述べよ。」と2、3問で極端に少なかった。チルーはテスト範囲内を丸暗記することにした。内容を把握しないで文章のみを暗記す

るのはナンセンスのように思えたが、チルーにとっては唯一の方法だった。そんな時、例の駅から寮までの1 kmの道でチルーは自分の約10 m先をあの寮祭のダンスパーティーで会った男子寮の総寮長が歩いている後姿を見た。彼の学校帰りに出くわしたらしい。チルーは先輩に対して失礼があってはいけないので追い越すことはしなかった。寮で「先輩たちに対して尊敬の念を抱け。」と厳しく教えられていることもあったが、ただ歩き続けるチルーにとって先に歩いている人を追い越す程いそぎの用事はない。時々、前を歩いている総寮長は足をゆっくり止めて脇に寄るような素振も見せた。そんな時はチルーも足を止め総寮長が歩き出すと自分も歩き始めた。総寮長は自分の後を沖繩のあの子が歩いてくるのがわかった。追い越してほしくて脇に寄ったりするが、あの子もピタッと足を止め決して自分の先にはいかない。変わった子だと思い、思いきって手まねきをして声をかけた。「テストはどうですか。」チルーは「難しい。法律の教科書を暗記するのは大変です。」と答えた。そこで総寮長はチルーにアドバイスを与えた。「要約して覚えたらいいですよ。」チルーは要約という意味が分からなかった。いつものように「ハー」と曖昧な返事をした。チルーが飲み込んでないことを知った総寮長は「法律」のテスト範囲等を聞いてきた。チルーはその質問にはしっかり答えることができた。翌朝、朝食時間に寮の食堂でチルーは総寮長から要約された「手書き」を渡された。それは法律の解説文が1 / 3ぐらいに縮められたものでやさしい言葉でまとめられていた。チルーは要約とは元の文を短く易しい言葉で表現することらしいとわかった。おかげでテストはいい点数をとることができた。このことを機にチルーは難しい本を読んだ後は必ずその内容を自分の語彙の範囲内で他にアウトプットできるようにすることが習慣づいた。この読解力の件でもチルーは本土の人と自分の学力の隔たりの大きさを実感した。本土の人達は大学入学前の18年間どんな学習生活を送ってきたのだろう。社会でも、学校でも、家庭でも全くちがった学習生活をおくったであろう総寮長にチルーはあこがれの念を抱くよ

うになった。

チルーは典型的な^{沖 縄 顔}ウチナーヅラだった。太い眉、大きい目、角張った顔。その上、真っ黒で1本1本が固い髪質の髪を長くのばして2本の3つ編にしていた。言葉もあまり話さずニコニコして首を横に振って「いいえ。」縦にうなづいて「はい。」と意思表示するので学友達から留学生だと思われた。学友の何名かはチルーから異国の情報を得ようと話しかけてくる者がいた。沖縄出身だとわかって、知りたい情報の対象が異国から沖縄にかわっただけで「沖縄のみなさんは日常的に英語を話されるのですか。」とフルセンテンスで聞いてきた。チルーの返事はニコニコしながら「いいえ。」の一言。相手は次の言葉を待ったがチルーは続けることができなかった。それでも相手は質問をかえて「なぜこの大学を選んだのですか。」と聞いてくる。チルーは「先輩がいました。」とスマイルで答えるのが精いっぱいだった。なぜ、そのような質問をするのだろう。チルーはその質問の必要性を疑問に思ったが、相手に失礼にならないように短文であっても答えるよう努めた。しかし自ら相手に質問返しはしなかったので会話は成り立たなかった。チルーは教室ではできる限り周りにだれもいない席についた。話しかけられてもそれに適切に答えることが出来なかったからである。必然的にチルーは前方の席に着席することが多かった。チルーは後ろを振り向かないので、後部席でどんな人達が授業を受けているかわからなかった。しかし後ろの席の人達にはチルーが丸見えだった。ある日、聞いたことのない小さな音がいくつもいくつもほぼ同時に聞こえてきた。教室の窓から外を見ると豆粒ぐらいの白い氷のかたまりが降っている。寒くもないのに空から雨以外のものが降ってくるのは前代未聞である。チルーは目で見るだけでなく氷の小さなかたまり達を手の平にのせてみたかった。すぐに教室を飛び出し電というものを肌で感じた。誰もチルーに続く者はいなかった。チルーにその気はなかったのに授業が一時中断された。学生達がチルーの行動に呆気にとられ、全員の視線がチルーに向けられたからだ。チルーが教室に戻ってか

ら授業は再開された。授業後、級友がこっそり教えてくれた。「先生が怒っていたゾ。」と。そして「あれは雹だ。」とも教えてくれた。チルーは先生がなぜ直接自分を指導しないのかなという疑問が頭をよぎったが、これ又深く考えなかった。みんなの貴重な時間を奪ってしまったという自責の念は特になかった。この時期からチルーの「鈍感力」があちこちで発揮され周囲の人々をあきれさせた。チルーが心を奪われたのはまだあった。霜柱である。爪楊枝や剣山のような氷の柱が地面から数え切れない程まっすぐに空に向かって生えてくるのである。足で踏むとすぐにグシャと折れた。上向きの爪楊枝を足で踏むと刺さって痛い。霜柱はちっとも痛くない。踏むたびにグシャグシャと音がした。そのグシャグシャという感触にチルーは魅了された。高坂駅のホームでも霜柱が育っている所を見つけた。登校途中ではあったが、昼になったら霜柱はなくなるかも知れないと思うと霜柱と遊ぶことを優先させた。霜柱をよく観察してみると冷たく細い棒状の氷が成長してその上から黒糖の粉をパラパラと振りまいたように見えるが更に目を凝らしてみると1つ1つの氷の柱が「よいしょ。」「よいしょ。」と喋る音が聞こえてくる。土をもちあげていることがわかった。それを壊すのは残酷だが、グシャグシャの音は滅多に聞けなかったのでつい潰すのに夢中になり時間がたつのも忘れてしまった。スクールバスの運転手さんに「ここにいたのか。」と声をかけられるまでチルーは霜柱と戯れた。スクールバスは何台もあったがチルーはこの運転手さんのバスに乗ることが多かった。チルーが乗ってこないのにおかしいと思ったら、「今いけば次のバスに間に合うから。」とうながされチルーは自分が登校中に道草をくったことを認識した。このことがあってからチルーはこの運転手さんに今まで以上に丁寧に挨拶をするようになった。心をこめた挨拶に言葉はいらない。最高の笑顔で御辞儀をし手を振るのだ。

(続く)

【Essay】

**Memories of my life at
Daito Bunka University.
Chilue in Naichi**

Shizuko Miyagi